

令和六年度 伊達市民憲章

作文コンクール受賞作品集



福島県伊達市

作品集発行にあたって

伊達市長 須田 博行

伊達市民憲章作文コンクールは、次代を担う市内の小・中学生の皆さんが、作文を通じて市民憲章の意味を捉え、自分の将来や伊達市の未来についてよく考える機会となるとともに、この作文を書くことで、ふるさとへの愛着心を育み、心豊かに成長してほしいという願いを込めて、平成二十九年度から実施しております。

伊達市民憲章は、伊達市合併十周年を機に、まちの一体感をつくりあげ、目標を共有し、市民の皆様とともに力を合わせてより良いまちづくりを進めていくための行動規範として作られたものです。

今回は、市民憲章の一つである「そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ちを」をテーマとして作品を募集したところ、小学生部門と中学生部門あわせて四百三十二点の応募がありました。自らの体験をもとに、地域の人々とのふれあいから感じたことや、助け合うことの大切さなど、まっすぐな視点で書き上げられた素晴らしい作品ばかりでした。

伊達市民憲章には、市民一人ひとりが自分のまちをより良くするために、「自分にできること」を具体的に自覚し、できる範囲で実行しようという思いが託されています。応募作品を読み、小・中学生の皆さんが、市民憲章の根本的な意義について理解し、「伊達市の未来をより良くするために自分たちが何をするべきか」と、真剣に思いを巡らせている姿勢に感動いたしました。

本作品集が多くのの方々の目に触れることで、市民憲章を身近に感じ、ふるさと伊達市への愛着がより一層高まることを切に願っております。

結びに、本コンクールの実施にあたり、児童生徒の皆さんをご指導いただきました先生方、多くの作品を真剣に審査いただきました審査委員の皆様、そして、ご協力いただきました関係者の方々に感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

目次

作品集発行にあたって

伊達市長

須田 博行

1

小学生の部

【最優秀賞】

響け太鼓のリズム

月舘学園小学校

六年

関根

湊笑

7

【優秀賞】

地域のつながりを大切に

堰本小学校

六年

佐藤

大惺

8

安心して暮らせる街、伊達市

小国小学校

六年

高野

一晴

9

【優良賞】

近所の人達とのつながり

伊達東小学校

五年

佐藤

葵

10

地域の温かさ

大田小学校

六年

津田

倫希

11

支え合いの気持ち

保原小学校

五年

清野

希空

12

あいさつと思いやりを広げたい

掛田小学校 六年 遠藤 花奈

13

【佳作】

支え合いのマラソン大会

伊達小学校 五年 小山 真桜

14

思いやりで繋がったお祭り

伊達東小学校 六年 斎藤 悠生

15

「伊達なまちづくり」を目指して

上保原小学校 五年 宮口 隆成

16

私にできること

柱沢小学校 六年 高野 真奈

17

中学生の部

19

【最優秀賞】

思いやりの種を私から

松陽中学校 一年 橋本 理央

21

【優秀賞】

音楽の力

伊達中学校 二年 芳賀 彩風

22

支え合いと思いやりについて考える

霊山中学校 三年 永井 美緒

23

【優良賞】

家族が増えて

伊達中学校 一年 富樫 優成

24

人々の取組の魅力

伊達中学校 三年 小野 将

25

支え合いと思いやり

梁川中学校 二年 大河原千暖

26

支え合いの町

桃陵中学校 二年 細田 果音

27

【佳作】

気がつけば梁川っ子

梁川中学校 一年 石川 楓菜

28

これからの伊達市について思うこと

霊山中学校 二年 菅野 愛

29

支え合いと思いやりは返ってくる

月舘学園中学校 一年 大河内瑞希

30

暮らしやすい町とは

月舘学園中学校 三年 齋藤 大智

31

講評

審査委員長 木村 圭吾

32

伊達市民憲章

34



小学生の部

最優秀賞

響け太鼓のリズム

月舘学園小学校 六年 関根 湊笑

「靈山太鼓の練習会に行くぞ。」

父が突然言いました。

「私は、行かない。」

と、小さな声で言ってみました。児童クラブから帰宅したら、ねるまでの時間は短くて貴重なので、好きなことに使いたいと思っっているのにと、腹立たしく思いました。

「どうせ、動画見るだけだべ。毎週水曜日はノーメディアデーだ。湊笑も行くぞ。」

父は、私の言葉が聞こえていたようで、勝手なことを言っています。納得はできませんでしたが、平和主義の私はあきらめました。

練習会場には、大太鼓や小太鼓が準備されていて、誰が叩いているのか太鼓と、笛の音色が響いていました。なんだかお祭り会場にいるみたいで、イライラしていた私の気持ちを浮き立たせてくれました。軽快なリズムにひたっていると、あんな風に叩いてみたいなあと思ってしまうていました。

靈山太鼓は覚えることが多くて、なかなかうまくいきませんでした。前から習っている子たちのように格好良く叩けなくて、つまらないな…と思っっていると、指導者の方が、

「もう一回、叩いてみっぺ。」

と言って、何回も練習に付き合ってくれました。くり返し何回もリズムを聞いて、叩いて、

「スッタリンコ リンコタンコ スッタリンコ リンコタンコ。」
と、リズムを口ずさみました。

二か月間の練習会は終わりましたが、続けて練習に来てもよいことになり、私は今も練習を続けています。叩き始めてから五か月が経ち、だいぶ上達してきました。

伊達市の地域芸能の一つである靈山太鼓を覚えて、伊達市を元気にしたいなと思います。今まで大事に伝統を育ててくれた人に代わって、私が伝統芸能を育てていかなければならないという気持ちも芽生えました。

今年の靈山太鼓祭りは、台風の影響で中止となりました。練習してきたことを、お客さんの前で発表できなかったことは残念だけれど、来年に向けて頑張ろうという気持ちがわいています。きっと上達した私を見てもらえるはずです。

たくさんさんの靈山太鼓に関わる地域の方が、靈山太鼓を通じて、私を支えてくれています。最近では、何度も同じ練習に付き合ってくれた指導員の皆さんに感謝の気持ちがあるので、私も自分より年下の子たちに、教えられる先輩になりたいと思うようになりました。そのために、練習を頑張りたいです。年齢や性別に関係なく、太鼓をたたいて笛を吹いているときは、全員真剣な表情ですが、叩き終わり、笑顔に変わる瞬間が好きです。みんなで心をつにして、何かをする体験は、動画やネットの世界にはない私の充実したりアルな世界です。

来年は、桃の郷伊達市の空に響け靈山太鼓。

優秀賞

地域のつながりを大切に

堰本小学校 六年 佐藤 大惺

ぼくのおじいちゃんは、仕事を退職してから、米作りをするようになりました。普通の農家さんは、自分のうちで全ての作業をして米を作ると思いますが、おじいちゃんは、地域の人と協力して作っています。例えば、田植えや稲刈りで使う大型の機械は、近所の人に貸してもらって、地域の人が手伝ってくれたり、反対におじいちゃんが手伝いに行ったりして作業をします。また、消毒は、ヘリコプターでやりますが、そのヘリコプターは、地域の人達でお金を出し合って借りています。夏から秋にかけて、消毒をするためのヘリコプターが、真つ青な空を飛んでいるのを見るのが、ぼくにとって、季節の風物詩になっています。このように、ぼくのお米は、地域の人達の協力があってできています。その分とてもおいしいお米になっています。

ぼくのおばあちゃんは、野菜作りが得意です。近所の農家さんで、野菜作りのアルバイトをしています。そこでもらったお金で、ぼくたちにいろんなものを買ってくれます。自分の畑でも、季節の野菜を作っています。夏には、きゅうりやオクラやトマト、秋から冬にかけては、大根や白菜やいんげんなど、いろんな野菜を作っていて、我が家の食卓に野菜料理が並びます。また、近所のおばあちゃんやおじいちゃん達と、作った野菜を分

け合ったりもします。おばあちゃんが、野菜を近所の人にあげると、「この前もらった野菜、うまかったよ。私が作ったものも食べてみて。」というやりとりがあって、そんな姿を見かけると、何だかほほえましくなります。そもそも、おばあちゃん達は、種や苗を植えるとき、家族の分だけではなく、近所の人におすそ分けする分まで考えて準備しています。時々、何人かで集まってお茶会をやって、にぎやかに過ごしています。ここでは、おばあちゃん達の手作りの漬物なども出されます。野菜や漬物の作り方など、いろいろな情報交換が行われていて、とてもおもしろいなあと思います。

また、地域の人達で、定期的に草刈りもしています。みなさん、六十代から八十代の方々です。午前中から始めて、お昼ご飯を食べ、午後からまた再開します。こんなに働いていて、体調を悪くしないのかなあと心配になるほどです。草刈りの様子を見ると、誰かがつかれたら、他の誰かが飲み物やタオルを渡してあげたり、声をかけ合ったりしながら作業をしています。

このように、堰本地区の人々は、みんなで助け合って生活しています。お互いになくてはならない関係です。家族以外にも、信頼できる人達が身近にいるというのは、安心できます。ぼくも、自分にできることで、地域にこうけんできるようにしたいと思います。

優秀賞

安心して暮らせる街、伊達市

小国小学校 六年 高野 一晴

ぼくの家は、おじいちゃんの家のとりにあります。ぼくが四歳の時に両親が家を建てて、福島市から伊達市に引っ越してきました。

引っ越してきて良かったと思うのは、すぐにおばあちゃんの家に行けるということです。おばあちゃん家に遊びに來たいとことすぐに遊べるのもうれしいです。

小学校に入学してからは三年生の一学期まで学童保育に通っていましたが、大好きだった指導員の先生が異動になってしまったことや、仲の良い友だちが来なくなってしまったこともあり、お母さんが帰ってくるまでとなりのおばあちゃん家で過ごすようになりました。放課後まっすく家に帰って來られるのもうれしいし、家におばあちゃんがいる安心感もあります。

おばあちゃんがいなくて子どもだけで留守番をしないといけない家もあると知り、ぼくの家にはおばあちゃんが居てくれて良かったと思います。時々近所の友だちの家に遊びに行くと、友だちのおばあちゃんがお菓子や軽食を出してくれたり、ぼくたちをいろいろ気にかけてくれることもあります。友だちのおばあちゃんはお父さんが子どもだった頃から知っていて、子どもだったお父さんの話を聞かせてくれるこ

ともあり、なんだか不思議な気持ちになります。

何十年もたっているのに、場所も周りにいる人も変わっていないのです。ずっと住み続けている人たちがいて、子どもが大人になって子どもを産み、同じところで育てる。そういう人は今減っているみたいだけど、ぼくは今の環境が好きです。

お父さんと同じ小学校、中学校に通うのもうれしいし、お父さんの時はこうだった、という昔の話を聞くのも楽しいです。

昔は近所の人も子どもたちを見守って、一緒に育てていたということをお母さんから聞いた事があるけど、ぼくの住んでいるところもまさにそうだと思います。

家の周りにはぼくのお父さんを知っている人がたくさんいて、友だちのお父さんもぼくのお父さんと友だちで、知っている人がたくさんいる、それだけで安心感があります。

これからも大人も子どもも助け合っていけるような、そんな良い場であり続けてほしいと思います。

ぼくを助けてくれた人をいつかぼくも助けてあげようと思います。

来年は、中学生なのでまだまだ不安だけど、一生けん命に勉強や運動に取り組み、立派な中学生になりたいです。そして、これからの伊達市や小国地区をもり上げていける大人になりたいです。ぼく一人の力は小さいけど、地域の力、団結を生かせば、大きな力になります。そんな伊達市小国地区になるようがんばります。

優良賞

近所の人達とのつながり

伊達東小学校 五年 佐藤 葵

わたしは五年生になって、料理やせんたくなどいろいろなことができるようになってきました。ですが、まだ一人では出来ないことも多いです。そんな時には、いつもおばあちゃんが教えてくれます。もしおばあちゃんがいなかったら、どうすればいいのか考えてみました。思いうかんだ答えは、近所の人達に頼るということです。

わたしは、伊達市でおいちゃんとおばあちゃんと一緒にくらしています。近所の人達は、作った野菜やモモやサクランボなどの果物をおすそ分けしてくれます。

もらった物はわたし達が食べたり、おばあちゃんがジャムを作り、近所の人達にお礼として、あげたりしています。そのことが、近所の人達と交流できたり、あまっている物を交かんするので、ゴミの量も減らしたりすることになっていいると思います。ふだんから近所みんなが顔見知りなので、何か起こった時にも支え合って、助け合ったことがあるので、とてもいいことだと思っています。

家族がコロナウイルスに感染した時には、近所の方がおかゆやポカリスエットを家に持ってきてくれたり、心配してくれたりしました。困った時に助け合うことや、作ったものなどを近所の人達と分かち合えて、とて

もいい関係です。

わたしも近所の人達がコロナウイルスなどに感染してしまった時には、ポカリスエットなどを持っていつてあげたいと思いました。そして、わたしが大人になったら自分が作った物やおいしかったものをあげて、おいしさも分かち合える関係にしたいです。そうすると町全体が温かく、安全で住みやすい町になってとてもいいなと思います。

わたしには、もう一人のおばあちゃんがあります。そのおばあちゃんは山おくで一人暮らしをしています。おばあちゃんは、車を運転することができないので、病院やスーパーに行こうとするだけでも大変です。そのことを知っている近所の人達は、車に乗せてスーパーや病院につれていつてくれているそうです。それに、おばあちゃん一人暮らしで話し相手がないので、さみしいと思います。なので、いつも近所の人達が様子を見に来てくれたり、話をしに来たりしてくれているそうです。わたしも行ったときにはたくさん話してあげたいなと思いました。

近所の人達とコミュニケーションをとっていないと生活していくのがとても大変なのだと思います。これから、近所の人達と支え合ってみんなとくらししていけるといいなと思いました。わたしも学校でみんなと生活しているなかで、勉強を教え合ったり、保健室につれて行ってあげたりしてみんなと支え合ってすごしていければいいなと思いました。これから、支え合いと思いやりの気持ちを忘れずにすごしていきたいです。

優良賞

地域の温かさ

大田小学校 六年 津田 倫希

ぼくは今、家族七人、伊達市で暮らしています。伊達市に住む前は川俣町に住んでいましたが、四歳の時におじいちゃんとおばあちゃんがいる伊達市に引っこしてきました。川俣では、お父さん、お母さん、妹の四人でアパートに住んでいました。その時は、同じアパートの人にはあいさつをしていましたが特に関わりはありませんでした。しかし、伊達市に引っこしてきてからは、おじいちゃんとおばあちゃんの友達か農家の人たちがよくぼくの家を訪ねてくるようになりました。外で遊んでいたリ、自転車に乗っていたりするとよく声をかけてくれます。そのため、地域の人のつながりがぐんと増えて、楽しくなりました。

ぼくは、おばあちゃんの作った梅干しを毎年楽しみにしています。今年は作っていなそうだったので、残念に思っていました。ある時、おばあちゃんについて行くとそこには梅の木が三、四本並んでいました。おばあちゃんの農家仲間が、

「今年も取っていきな。」

と声をかけてくれました。今年もおばあちゃんの梅干しが食べられるうれしさと同時に、人の心の温かさを感じました。

ぼくの通う大田小学校は、地域との交流が盛んです。年に二回、地域の

人と一緒に花を植える地域交流活動や五年生の時に行った支援学校との交流。また毎日見守り隊の方が家まで安全に帰れるように見守ってくれます。いつも見守り隊の方と話しながら帰るのでとても楽しいです。コロナがはやる前、ぼくが一年生のころは地域の人も混ざって運動会が開かれていて、すごく盛り上がっていました。お父さん、お母さん世代だけではなく、おじいちゃん、おばあちゃん世代の人達まで運動会に参加していました。世代関係なく大田のみんなが楽しんでいたのを今でも覚えています。

ぼくの住んでいる大田の二井田地区では、コロナ前まで部落のお祭りがありました。近所のおじいさん達が太鼓のたたき方を優しく丁寧に教えてくれました。そして、お祭りの時には、山車に乗って太鼓をたたきながら地区を練り歩きました。コロナでこのお祭りはなくなってしまったけれど、このお祭りや太鼓の演奏が今まで伝わってきた立派な伝統であり、これからも残していきたいと思っています。部落のお祭りや太鼓の演奏がまたできるように今の自分にできることを考えて行動したいです。

このように、色々な人達に支えられて毎日を過ごしています。その中でぼくは伊達市の人の心の温かさを感じることが多く、とても居心地がいいです。そんな伊達市が大好きです。大人になっても大好きな伊達市であるように、地域の行事に積極的に参加し、思いやりの心をもって生活していきたいです。

優良賞

支え合いの気持ち

保原小学校 五年 清野 希空

私は、家族や友達と過ごしていて、支えられているなど感じる時があります。

それは、なんんでいることや困っていることについて、友達や家族や先生が相談にのってくれた時です。私は、三年生のときにいじめにあい、いつも学校生活が不安でいっぱいになりました。そんな時、学校であるお便りが配られました。そのお便りには、スクールカウンセラーのことが書かれていました。スクールカウンセラーとは、学校で私達のなやみを聞いてくれる先生のことでした。私は、いじめのことが心配で頭がいっぱいだったので、すぐにお母さんに

「カウンセリングをうけてもいい。」

と聞きました。お母さんはすぐに

「いいよ。」

と言ってくれたので、受けてみることにしました。カウンセリングで、自分の思いを話すことができて、よかったなと安心しました。相談した後、いじめはなくなりました。先生方や、お父さん、お母さんが私を支えてくれたおかげで、今では、友達と楽しく学校生活を送ることができています。

他にも、学習面で「支えられている」と感じることもあります。例えば、授業中に私がわからない問題で困っていると、友達が

「この問題はこうやるんだよ。」

と、やさしくやり方を教えてくれます。また、家で宿題に取り組んでいる時にも、お父さんやお母さんが分かりやすく教えてくれます。私は、やさしい家族や友達をこれからも大切にしようと思います。私には、妹二人と弟が一人います。今度は、私が友達や家族にやさしく勉強を教えて、支えていきたいです。

私は、小学校で保健委員会を担当しています。学校のみんなの健康を確認するための健康観察カードを、毎朝学級に配る仕事をしています。学校では、外や室内で遊んでいる時に転んでけがをした人がいたら、けがをしたところを水で洗って、保健室に連れていってあげたり、教室に戻ってばんそうこうをはってあげたりしてくれる人もいます。私も、自分の身近な人だけでなく、だれにでも心やさしく親切に接することができたい人になりたいと思います。学校の登下校や、休みの日に、保原町の道路を歩いていると、時々、重そうな荷物を持っているお年寄りや、車が通る道路をゆっくり歩くお年寄りを見かけることがあります。私は、困っている人や助けが必要な人を支えたいと思いますが、勇気が出なくてなかなか声をかけることはできません。私がいつもだれかに支えてもらっているように、周りの人に親切にすることができれば、支え合いが広がり、相手も自分も気持ち良く過ごすことができると思います。いつか、自分から

「大丈夫ですか。」

と声をかけられる人になりたいです。

優良賞

あいさつと思いやりを広げたい

掛田小学校 六年 遠藤 花奈

私は、小さい頃から両親に、「おはようございます」「ありがとうございます」「いただきます」などのあいさつはしっかりと教えられるようになってきました。

小学校に入学する時に、霊山町に引っ越してきた私は、はじめは知らないばかりで不安でした。しかし、両親の教えの通り、近所のおじさんやおばさんにあいさつを続けていると、

「遠藤さんの家の子だね。今日も元気だね。」

などと声をかけてもらえるようになりました。私も、今日もおじさん、おばさんが元気で良かったと思うようになり、家族ではない人々のことも気にかけるようになりました。

あいさつをたくさんしてきたことで、小学校生活の六年間で、たくさん地域の人々と顔見知りになりました。夏の暑い日の下校中には、

「おかえり。暑かったでしょう。」

と、冷たいジュースを渡してくれました。地域のお祭りで太鼓を叩いていた時には、

「泣き虫さんだったのに立派になったね。上手に叩けているね。」

と褒めてくれました。家族ではなくても、私の成長を見守ってくれている人々がこんなにいるのかと思うと、とてもうれしくなります。

小学校に入学したばかりの頃、私は子どもたちだけの登校班で登校するのが嫌でした。なぜなら保育園の時は、車でお母さんと一緒に登園していたからです。私の住む地区では、民生委員のおばあさんが、毎年四月中は学校まで付きそってくれると聞いていましたが、毎朝お母さんと離れる時は、やっぱり寂しくて、たくさん泣いてしまいました。そんな時、登校班の上級生たちが

「持つてあげるよ。」

と、荷物を持つてくれたり、手を繋いだりしてくれたおかげで、不安で寂しい気持ちが無くなりました。笑顔で登校できるようになりました。

そして今、私は班長を務めています。荷物が多い日は、低学年の子の歩くスピードが遅くなってしまうので、荷物を持つてあげています。正直、自分の荷物だけでも重いので大変です。でも、そんな時は、私が一年生の時のことを思い出します。これを上級生がやってくれたことを思うと、これからは私が下級生のために頑張ろうという気持ちになれるからです。

あいさつを自分からしたり、困っている人に手を差し伸べたりするのは少し勇気がいるけれど、少しの頑張りでみんながつながり、自分を守ってくれる人が増えると思います。あいさつから、人とのつながりが増え、人と人が支え合いながら、皆が笑顔で安心して過ごせる伊達市になるよう、優しく思いやりのある心を持ち続けたいです。

佳作

支え合いのマラソン大会

伊達小学校 五年 小山 真桜

伊達市には「伊達ももの里マラソン大会」がある。この大会には、毎年日本全国から多くの人が参加している。私もこども園の時に参加したことがある。父と親子の部に参加し、一キロメートルを走った。暑くてつかれて大変だったことを、今でも覚えている。その時会場には、ものすごくたくさんの方がいたことが印象的だった。

今年は第六十二回の大会が四月に開かれた。私の父は、ボランティアで招集係をやった。大会に出場する選手をスタートの位置へ集まるよう呼ぶ係だ。事前に招集することで、よりスムーズに大会を進めることができる。

そして私の祖父もボランティアとして参加した。祖父は町内会として道案内をしていた。祖父は、遠い所からあぶくま急行で来た人をゆうどうしていたそうだ。祖父に聞くと、あぶくま急行をおりて、たくさんの方がこの大会に向かったそうだ。初めて来た人もいたが、中には何度もこの大会に出て、道になれている人もいたと聞いた。遠くからたくさんの方が参加していることだけでもすごいのに、何度もこの大会に参加している人がいるなんてすごいと思った。

さらに祖父に話を聞くと、大会にはさまざまなボランティアの人達が

いることが分かった。給水係、駐車場係、折り返し地点ゆうどう係、ゴールゆうどう係、交通整理係、きゅうご係などたくさんの方がいるそうだ。

給水係は、走っている選手に水をわたす係だ。暑い中走っている選手にとっては、なくてはならないものだと思う。駐車場係は車で来る人達の案内をする係だ。あぶくま急行以外でも、車で来る人がたくさんいる。車で来た人が迷わずに駐車するためには必要な係だと思う。折り返し地点ゆうどう係やゴールゆうどう係は、初めて走る選手でもコースに迷わず走り切ることが出来るようにするために必要な係だと思う。交通整理係は、安全に会場へゆうどうする係だ。きゅうご係は具合が悪くなった人を助ける係だ。もしものために備えることは大切だと思う。このように、伊達ももの里マラソン大会はたくさんの方のボランティアの係の人達によって支えられている。

そのボランティアの人達は市内の色々な所からやってくるそうだ。体育協会、高校、中学校、PTA、町内会、婦人会、会社、銀行、消防、けいさつ、市役所などたくさんの方がたずさわっている。こんなにもたくさんの方がボランティアとして関わっているなんてすごいと思った。

こんなにもたくさんの方々に支えられている伊達ももの里マラソン大会は、みんなに愛されているんだなと思った。みんなで支え合っているから、安全で安心な大会になっていて、遠くからでも、何度でも「また来たい。」と思ってもらえるような大会だなと思った。私もいずれ、支え合いに参加したいと思う。

佳作

思いやりで繋がったお祭り

伊達東小学校 六年 斎藤 悠生

ぼくの住んでいる伏黒では、毎年十一月に「水雲神社例大祭」が行われています。二年に一度、太鼓をたたきながら山車を引いて、地域を回ります。夜は「お宮入り」といって、各地域ごとに大人の人が山車をかついで、境内に入って行きます。ぼくの祖父と父も参加していて、すごくあこがれるし、各地域で大きなかけ声をかけながら、山車をゆらして境内に入っていくすがたは、圧巻です。ぼくも、五才から太鼓の共演に参加しています。

去年は、新型コロナウイルスも落ちつき、五年ぶりの開きでした。待ちに待ったお祭りにぼくの気合いも十分。しかし同時に、不安もありました。ぼくの記憶に残っているのは、高学年のお兄さん、お姉さんとたたいた太鼓で、去年は五年生のぼくが子どもの中で一番年上だったからです。不安な気持ちのまま、太鼓練習の初日を迎えたが、その不安はすぐになくなりました。

「おじさんたちも久しぶりだから、大丈夫。一緒にがんばろう。」と声をかけてくれたからです。小太鼓に慣れてきて、大太鼓にも挑戦しました。小太鼓は低学年や幼稚園生もたたくので、合わせるのに一苦労でしたが、何度もおじさん達が練習を見てくれました。

練習を重ねていると、大人達が山車を直したり、祭り当日に向けて準備

したりしているすがたを見ました。父に話を聞いたら、

「久しぶりだから忘れていたと思ったけれど、やっているうちに思い出したし、お祭りの準備も楽しいよ。」

と言っていました。長く続いている伝統あるお祭りだから、体が覚えているのかな、と思ったし、一つのお祭りに向かって協力している父のすがたは、カッコいいなと思いました。

祭り当日になると、地域の人だけでなく、伊達に住んでいない親せきの人たちも集まって、とても盛り上がります。ぼくも、太鼓のたたき手として、一生けん命がんばりました。気づくと、自分から、

「次、ぼくが太鼓たたきますか。」

と積極的になっていました。地域の人にも

「がんばっているね。」

と声をかけてもらったので地域の人とたくさん交流ができたお祭りになりました。

このお祭りを通して、ぼくが思ったことが二つあります。一つ目は、ぼくが教えてもらった太鼓、地域の人を守ってきた山車をぼくも守り、次の世代に繋げていきたいということです。二つ目は、地域の人との繋がりを大切にしていきたいということです。このお祭りを通して、ぼくは地域の人にたくさん支えられていると改めて感じました。これからも、地域の行事に積極的に参加して、地域の人との繋がりを大切にしていきます。

佳作

「伊達なまちづくり」を目指して

上保原小学校 五年 宮口 隆成

ぼくが住んでいる伊達市は、令和六年七月一日現在で人口五万六千二百七十五人、二万三千二百六十九世帯の市です。生まれた時からずっと住んでいるこの伊達市のことがぼくは大好きです。

伊達市の良いところは、たくさんあります。自然豊かで空気や水、モモなどの果物がとてもおいしいところ。人がやさしいところ。地域の人が気軽に声をかけてくれるので、明るくうれしい気持ちになります。また、無料で遊べる室内の遊び場があり、暑い夏も寒い冬も快適にたくさん体を動かすことができます。また、毎月市政日より「伊達」が発行されており、いろいろな町の情報を知ることができます。赤ちゃんからお年寄りまでが必要な乳幼児健診や健康通信などの情報、八月だと夏祭りに関する情報もあり、それを見ることで伊達市のいろいろなことを知ることができます。さらに、この市政だよりには、休日の当番医や、毎月の水道修理当番ものについて、伊達市で安心してくらしていけるようにさまざまな人達が支え合い、助け合いながらこの「伊達市」を作っていることも分かります。

ぼくが今取り組んでいることは大きく二つあります。

一つ目は、今年の四月から伊達少年消防クラブに入団したことです。ク

ラブにはどんないいところがあるか、また、クラブにいらつしやる消防士の方がやさしく対応してくださるということや友達に教えてもらったので入ってみようと思いました。

そこでは、毎月、防災学習や放水訓練、出動訓練、規律訓練などの訓練の他に、はしご車にも乗りました。消防署内の見学では、いろいろな部屋を見せてもらったけれど、一番すごいと思ったことは、司令室です。きん急な要請が入ってからその場所を確認し、隊員達に出動を命令するまでがとても速く的確でスムーズなことにおどろきました。来月は救急法を学ぶことになっています。これらの学んだことがこれからの伊達市のために、少しでも何か役立つのではないかと考えています。

二つ目は、地域の活動や祭りなどへの参加です。来月には地域の古紙回収があります。両親といっしょに参加し、活動したいと思っています。また、伊達市の夏は祭りや花火大会などの行事がたくさんあります。大勢の地域の方々が祭りに参加したり手伝いをしたりして、支え合いと思いやりの気持ちを感じられます。ぼくも積極的に参加したり、地域の特産物を食べたり、自分にできることからこうけんしたいです。

ぼくも、伊達市民憲章の一つ「そだてましょう支え合いと思いやりの気持ち」を心に、「伊達なまちづくり」を目指して自分なりにできることから始めていきたいと思っています。

佳作

私にできること

柱沢小学校 六年 高野 真奈

伊達市には、様々な年代の人たちが住んでいます。地域の人はとてもやさしく、いつも親切にしてくれます。私はこの町が大好きです。そんな思いやりのある温かな伊達市のために、がんばりたいことが二つあります。一つ目は、あいさつをがんばることです。私が通う柱沢小学校の通学路では、散歩や農作業をする地域の方を見かけることがよくあります。登下校しているときに近所の方にあいさつをすると、

「おはよう。」

「こんにちは。」

と、優しくあいさつを返してくれます。時々、

「おかえりなさい。」

と、声をかけてくれるときもあり、その言葉を聞くと思いやりを感じてうれしい気持ちになります。あいさつをすると温かな気持ちになるので、登下校中、積極的にあいさつをすることを心がけています。一方で、あいさつが返ってこないときもありました。その時は私のあいさつが無視されてしまったように感じ、少しはずかしくなりました。しばらくあいさつをあまりしなくなってしまうかもしれませんが、私にあいさつをしてくれる人に同じ思いをさせてしまうことに気づきました。今では、あいさつを返してく

れないかもしれないと不安になるのではなく、

「おはようございます。」

「こんにちは。」

と、元気にあいさつをすることになっています。思いやりの気持ちをもちながら、互いに気持ちのよいあいさつができるようになればうれしいです。二つ目は、ごみを拾うことです。これも登下校中のことですが、最近、通学路にごみが落ちていることが気になっています。毎日同じ道を歩いていると、前には無かったごみがいろいろな場所に落ちていることに気がつきます。空きかんやおかしのふくろなどだれかがごみを家に持ち帰らずに、ポイ捨てしたのだろうと思います。そんな通学路を見ると残念な気持ちになります。ある日、家でテレビを見ているとブンケンさんという方が出演するニュース番組が始まりました。ごみ拾いをするコーナーで、雨の中道に落ちているごみを一生けん命拾っているブンケンさんの姿が放送されていました。ただでさえ大変なごみ拾いを雨の中でがんばる姿を見て感動しました。自分もしごみが落ちているのを見つけたら、見て見ぬふりをせずに拾ってみようと思います。また、自分自身はポイ捨てを絶対にせず、ごみの持ち帰りを心がけたいと思います。同じ道を使う登校班や地域の人のためにがんばりたいと思います。このように、あいさつとごみ拾いをがんばりたいと思います。みんなのためにという思いやりの気持ちをもちながら、自分にできることに挑戦していこうと思います。



中学生の部

最優秀賞

思いやりの種を私から

松陽中学校 一年 橋本 理央

私には、もうすぐ百歳になるひいおばあちゃんがあります。自宅で生活しています。ただ足が悪いので、杖をついて歩いており、一人でできないことも多くあります。そのため、デイサービスに通っていて、職員の方が手助けをしたり、私の祖母や親せきの人が身の回りの手伝いをしたりしています。ひいおばあちゃんの家に行くと、デイサービスでの出来事や楽しい話をたくさんしてくれて、いきいきとして見えます。

私はこの夏、学校での福祉体験に参加し、福祉施設でのボランティア活動と高齢者疑似体験を行いました。福祉施設では、入居者の方と体操をしたり、歌を歌ったりしました。また、職員の方にリネン交換を教えていただき、実際に入居者の部屋で交換をしました。汗だくで肩が痛くなり、とても大変でした。この日の体験で、職員の方は、直接入居者と関わることばかりではなく、入居者が生活しやすいよう、陰で様々なサポートをしていることがわかりました。「入居者様のために」と言っていた言葉がとても印象に残っています。また、高齢者疑似体験では、重い物を身につけて階段の上り下りをしたり、字を書いたりしました。重い物を身につけて行動するだけでも大変でしたが、更にゴーグルとイヤーマフをつけて体験しました。視界がぼんやりとして、見える範囲も狭くなり、周りの音もよく聞こえませんでした。一番大変だったのが、これら全てを身につけての

階段の上り下りです。実際にやってみると、介助者がいても途中で踏み外さないかと不安や恐怖が襲ってきました。介助者がいたので少しは安心でしたが、これがもし一人だったら、と思うととても怖くなりました。この体験を通して、今までわからなかった高齢者の大変さがわかりました。今回は短い時間での体験でしたが、これが日常だと思うと、正直大変で辛いと感じました。疑似体験を終えたとき、ひいおばあちゃんの顔を思い出しました。いつも明るくいいききとして見えますが、実際はとても大変で不自由な思いをしていたのだと感じました。ひいおばあちゃんに会ったときには、今回の体験で感じたことを思い出し、少しでも支えになりたいです。

福祉体験やひいおばあちゃんとの関わりを通して、誰もが明るく暮らせる伊達市にするためにはどうすればいいか考えました。私は身近な人を支えることから始めたいと思います。思いやりの心を持ち、どんなときも手を差しのべられる人になりたいです。一人一人が思いやりの心を持ち、お互いに支え合えば、それがやがて大きな花となり、幸せにつながると思います。年代問わず全ての人が幸せだと感じ、いきいきと生きていく伊達市がこれからも続くよう、思いやりの種を私からまいていこうと思います。

優秀賞

音楽の力

伊達中学校 二年 芳賀 彩風

みなさんは、音楽についてどう考えるだろうか。私にとって音楽は、人と人をつなぐ「架け橋」だと考える。

二〇二四年五月二十六日、吹奏楽きらめき事業第九回合同演奏会が実施された。この演奏会は、東日本大震災で被害にあった伊達町を音楽の力で復興させようという目的で始められた。しかし、コロナの影響もあり、今年は五年ぶりの開催となった。私たち伊達中学校は、他の伊達市内にある中学校四校と、伊達小、掛田小の六年生のみが加わった、総勢約一一〇人という大編成で演奏することになった。演奏会前の合同練習会では、初めての顔合わせで不安な気持ちもあったが、自分と同じように音楽を愛している中学生が伊達町にはこんなにもいるんだと思い、うれしい気持ちでいっぱいだった。また、もう一つすごくうれしいことがある。それは、東京藝術大学音楽部の学生さんが実際に私たちに指導してくださり、演奏会で一緒に演奏してくださるということだ。今よりもっといろいろなことが知れて、たくさん学べると思うと、演奏会までがすごく待ち遠しかった。それから私は、藝大生の方がおいでになるまでの間、質問したいことをまとめたり、できるだけ上達した姿を見てもらえるようにたくさん練習したりした。そしてついに、その日が来た。パート別で教えてもらう時

間は本当に楽しくて幸せな時間だった。今まで悩んでいたところも改善できて良かった。藝大生の方が入った合同練習会も音の出し方や音色が私とは段違いでとても勉強になった。そしてついに、本番になった。本番は、私たちだけでなく、高校の部や梁川交響吹奏楽団の方々などの演奏もあった。自分たちの演奏では、楽しみつつ、全力で吹けた。そして最後に藝大生の方も含めた演奏をした。お客さんは会場いっぱいに入っていて、すごく緊張したけど、演奏が始まると、今までの緊張が吹っ飛ぶくらい楽しい演奏になった。途中から地元の合唱団の方々もコーボで歌ってもらうことになった。歌は観客の方にも歌ってもらった。会場全体にいる、およそ一五〇〇人の方が、一体となって一つの音楽を作り出しているこの光景に私は深く感動した。私はそのとき、音楽の力は魔法のようなもので、人と人をつなぐことができるんだなと思った。私は、あの演奏した光景を一生忘れないだろうし、これからも音楽に向き合って、大切にしていこうと思った。そして、これからも伊達町が音楽の力で輝いてほしい。

優秀賞

支え合いと思いやりについて考える

霊山中学校 三年 永井 美緒

伊達市には赤ちゃんからお年寄りまでたくさんの方がいる。そんな伊達市で暮らしている人々は普段支え合いと思いやりの気持ちをもつて生活できているだろうか。誰しも一度はまわりにたくさん人がいるから誰かがやってくれる、自分は関係ないからやらなくていいと考えてしまったことがあるだろう。私自身、困っている人がいたときに誰か助けてくれるだろうと思い、声をかけられなかったことがあった。しかし、あることがきっかけになり、私の心が動かされた。

私はある日、保原町の病院に行った。そこにさまざまな年代の人がいる病院で混んでいて、受付の方や看護師さんはとても忙しそうにしている。そんな中、薬局の場所がわからなくて受付の方にたずねている老夫婦がいた。受付の方は「この病院の隣にあります。」と言って受付の対応に戻ってしまった。老夫婦はわからなくて困っている様子で受付の前に立っていた。私はこの状況を見ているだけで、助けることができなかった。そのとき、私の隣の椅子に座っていた女性が動き出した。女性は老夫婦のもとに行き、「薬局はこの病院を出て左にありますよ、一緒に行きましょうか。」と言った。老夫婦は「大丈夫だよ、ありがとうね。行ってみるわ。」と言って病院を出て行った。私はこの

行動を見て、女性の声をかけようとする勇氣や思いやりの気持ちに心を動かされた。老夫婦が女性にありがとうと感謝をしたのも思いやりの気持ちなのではないかと感じた。

私はこの経験から、支え合いと思いやりの心とは相手の立場に立ち、気持ちを共有して理解し、お互いに助けあっていることだと考えた。このような心をそだてて住みやすい町を維持していくためには、人の違いを理解して受け止めることが大切だと思う。小さい子どもや子育てをしているお母さん、サラリーマン、お年寄りの人などいろいろな人がいて生活の仕方は人それぞれである。できることが限られている中で生活をしている人もいるため、バスや電車の席を譲ったり車椅子に乗っている人やベビーカーを押している人がエレベーターに乗れるように私たちはなるべく階段を使ったりするなど地域の人々が協力していく必要がある。

また、地域の中で、不安なことや悩みを相談したり、助けてもらったり困ったりしている人がいたら助けてあげることができる関係をつくっていくことも大切だと思う。

私はこれから、相手のことを自分のこととして捉え、伊達市の人々が安心してくらせるようにするためにはどうしたらよいか考えて行動しながら生活していきたい。それによって私のように心を動かされ、行動してみようと思う人が一人でも増えてほしい。

優良賞

家族が増えて

伊達中学校 一年 富樫 優成

私は、この作文のテーマ「そだてましよう支えあい」と思いやりの気持ちを持ちを」を見たときに、双子が頭に浮かんだ。

令和五年十一月三十日、私は双子の兄になった。今まで四人家族で暮らしていたが、六人家族になり、お世話で時間に余裕がなくなっている。だが、そんな大変なときに助けてくれる人達がいる。

まず、祖父母だ。私の祖父母は、自分たちがどこかへ出かけるときや、親が仕事で忙しいときなど、いつも家に来て子守をしてくれる。母は、

「大人が一人増えるだけで、だいぶ楽になる。」

と言っている。ほとんど毎週子守をしに来てくれる祖父母に家族全員が感謝している。

次に、部活動の仲間たちだ。私は野球部で、いろんな場所で練習や試合をすることがよくあるが、両親が双子の子守もしなければならないので、送り迎えができなくなってしまうことがある。そんなとき、部活仲間の親御さんが、

「乗せてくよ。今は大変な時期だから送り迎えするよ。」

と言ってくれた。このとき、私は、人が大変な思いをしているときは、

自分ができることを探し、お互いに助け合って生きていくことの大切さを、改めて実感することができた。

自分のまわりの人達は、思いやりをもつてみんなで助け合って生きている。では、伊達市では、そのような思いやりをもった行事があるのだろうか。私がふと頭に浮かんだのは、「こども食堂」だ。こども食堂とは、地域住民のボランティアや自治体が主体となり、子どもに無料、または安価で食事を提供する場のことである。このイベントには、貧困家庭や孤食の人たちが「温かな団らんができるように」という思いやりの気持ちが込められている。実際、伊達中央交流館では、月の第二土曜日にこども食堂が開かれており、地域の子供たちから、お年寄りの方までたくさんの人たちが足を運んでいる。こども食堂は、たくさんの方の交流の場になっているのだ。

このように、私たちは、たくさんの方の「思いやり」や「支え合い」の中で生きている。そして、この思いやりや支え合いの気持ちを育てていくには、改めて自分が支えてもらっているものに感謝をすることが大事である。さらに、自分が経験したことや、大切にしたいことを、次の世代に伝えていくことが、よりよい伊達市を築いていく上で必要なことだと、私は考える。

優良賞

人々の取組の魅力

伊達中学校 三年 小野 将

私は、夏休みに、とある研修会に申し込みをしました。そこで、研修に行く前の課題として、自分の故郷の魅力について考えてくるといふものがありました。他県の人も来るので、故郷、というと福島県。そうすると鶴ヶ城や桃でしょうか。でも、自分の故郷とは伊達市だから、伊達市のことを改めて調べなくては。そう思い、図書館で調べることにしました。

そこで、伊達市の市勢要覧を見つけました。霊山のきれいな景色や梁川城跡、長岡天王祭など、自分の知っている魅力が書いてあり、良さを改めて確認することができました。そして、読み進めていくと、たくさんの人が様々な角度から支え合い、思いやりの気持ちをもちながら生活をしていることにも気付きました。例えば、育児。屋内で遊べる施設があり、私の弟も小さいときに遊びに行っていました。これは、東日本大震災で放射線による外遊びの不安があったときに、子供たちが遊べる場所を作ろうという気持ちからできたものだと聞きました。それから、産業。道の駅では、たくさん農産物や特産品が売られています。これは、伊達市の魅力を発信する場所でありますが、同時に、販売するための場所を提供し、生産者を支える施設でもある

と感じました。伊達市には、子供のことを考えたり、生産者のことを考えたりと、いろいろな立場の人を思いやり、みんなが元気に過ごそうという取組がなされていました。故郷の魅力は建物や自然だと考えていましたが、町の人たちが支え合っていること、支え合うために取り組んでいることも魅力なのだと感じました。

町の人が支え合うためには、お互いが交流して、何が必要かを考えることが大切です。そのための施設として、最近できた新しい町の駅はとてもいいと思いました。私も時々友達と行きますが、小学生が数人で楽しそうにゲームをしていたり、年配の方が食事をしながら話をしていたりします。同じ屋根の下に、いろいろな年代の方が集まっているのです。普段からいろいろな人が集まれる場所があるということは、そこでいろいろなイベントを行えば、たくさんの方の交流を生むことができ、新たな課題を知り、それを支えることができるようになっていくと思います。

このように考えると、町の駅に時々貼ってある楽しい企画が書いてあるポスターは、そのイベントを通して、人々が語り合い、支え合い、明るく楽しく暮らすためのものなのだろうと考えることができるようになりました。これからは、そのようなイベントに参加して、社会をつくり、支える一員になっていきたいと思っています。そして、大人から子供へ、支え合いの輪が広がっていくようにしたいです。

優良賞

支え合いと思いやり

梁川中学校 二年 大河原 千暖

皆さんは、自分が辛い思いをした時、同じくらい辛い状況の人を思いやり、お互いに支え合う事ができますが。

数年前、私の住む梁川町で川が氾濫し、水害が起きました。当時小学生だった私の唯一の心の支えとなったのは、地域の方々の温かい言葉一つひとつでした。

私の家では家の中の一階全てが浸水し、家族で二階に垂直避難しました。(どうして、こんな事に……。) あつという間に起こった出来事に、私はただ泣くことしかできませんでした。

避難所での生活が始まると、地域の方には、とても親切にしていたきました。

「困った時はお互い様だからね。」

そう言って食料や生活用品などを持ってきてくださったのです。ただいたたくさんの温かい言葉とお見舞いの品々は、どれも大切なもので、本当に感謝してもしきれない気持ちでいっぱいでした。

そして先日、母が教えてくれました。

「あの時お世話になった人たちは、うちより被害もひどくて、大変な人たちがほとんどだったんだよ。」

私はとても驚いたのと同時に、とある疑問が浮かびました。あちらも大変だったはずなのに、どうして私の家の事を気にかけてくれたのだろう、と。「こまった時はお互い様。」とは言えど、無理をさせてしまっていたのではないか。この疑問の答えは一つでした。

これこそが、『支え合い』と『思いやり』だったのです。困っていたら、お互いを見ながら思いやり、助け合い、協力しながら支え合う。あのたくさんのお親切や温かい言葉は、多くがこの『支え合い』と『思いやり』によるものだと考えたら、なんだかとても、嬉しい気持ちになりました。

それから私は、支え合いと思いやりを意識し、考えながら生活するようになりました。支え合いと思いやりの気持ちには、困っている人や落ちこんでいる人を勇気づける力があると知ったからです。

私は、これからも生きていく上で、支え合いと思いやりの気持ちを大事にしていこう、と思いました。そして、それによって、あの地域の方のように、誰かを勇気づけるきっかけ作りになればいいな、と感じています。

優良賞

支え合いの町

桃陵中学校 二年 細田 果音

私は吹奏楽部に所属しています。そして、私の所属している吹奏楽部では三年生引退と同時に「ありがとうコンサート」という演奏会を行います。毎年、生徒でTシャツとポスターのデザインを考え、ポスターはお店などに貼っていただいています。そのポスターを見て会場にはたくさんの方が来てくださいます。

私は二年生で二回目の演奏会でしたが、去年は一年生だったこともあり、できる曲も少なかったのであまりステージには立てなかったのですが、今年はある曲も増え、すべてステージで演奏することができました。その時、とても達成感がありました。一年生のころは少ししか出ていなくてあまり実感が湧きませんでした。今年はすべてに出てとても疲れましたが、とても楽しかったです。

お客さんがたくさん来てくれて、緊張もしましたがお客さんがいたからこそ良い演奏を聴いてもらおうと頑張れました。演奏が終わったとき、お客さんの方を見ると笑顔で拍手をしている姿が目に入り、喜んでくれたのでよかったなと思いました。

そして演奏が終わった後、片付けをしている時のことです。二人のお客さんの、

「ポスターを見て気になったから来てみたけど、良かったね。」

「そうだね。特に最後の曲が良かったな。」

という声が聞こえてきました。とても嬉しかったし、ポスターもたくさんの中から選んだので大変でしたが、無駄ではなかったなと思いました。募金のお願いをし、お金を入れてくれる方がたくさんいたので改めて地域の方々に支えられているのだなと思いました。

そして、保護者の方々も会場の椅子並べや受付、会場全体の運営をしてくださっていました。支えてくれる方がいないとこの演奏会は開催できないんだなと思いました。

「ありがとうコンサート」がいつから始まったのかは分かりません。しかし、これまで地域の方々が支えてきてくれて続いているのだと思います。これまで多くの支えがあつて演奏会を開催できていたのかなと感じました。

音楽は、人を笑顔にできるものだと思いますが、支え合いも生まれるものだというのを改めて感じました。来年も演奏会があります。その時も地域、保護者の方々と支え合って「ありがとうコンサート」を成功させたいなと思いました。

佳作

気がつけば梁川っ子

梁川中学校 一年 石川 楓葉

私達の住む伊達市は、地図で見ると、いくつかの町が合併してできた面積が広く、とても大きな市です。主要な町でも、小さな合併が進みました。

私が住んでいる梁川町でも、八年前小学校の統廃合がありました。白根、五十沢、富野、大枝地区の小学校が梁川小学校に統合されました。各地域では、伝統や地域色を取り入れた学習内容も多く、統廃合に対する反対や寂しさもあったと、授業を通して学んできました。私が小学校に入ってから、運動会や学習発表会を通して、他の地区の名産品が出てくる競技があったり、方言や生活の様子を表現したりして、私は知らず知らずのうちに、「梁川っ子」になっていたのかもしれません。

実は、私は両親の仕事の都合で梁川に住み始めたため、周りに親戚などはなく、新しい住民でした。両親も初めは知り合いがなく、地域にとけこめなかったと聞きました。そんな中で、兄と私はスポーツ少年団を始めました。数年間毎日のように会ううちに、大変親しくなりました。スポーツ少年団をやっていたら関わらなかった、栗野や堰本地区の人とも友達になりました。伊達選抜や練習試合などの交流の場では、伊達、霊山などの別の地区の人とも関わり、普段は別のチームでライバルとして戦っています。選抜では同じ「伊達市」の仲間として「DATE」と書いてあるユニホームを着て、一緒に戦いました。また、学校には、外国から来て日本に住んで頑張っている仲間もいます。

そのようなつながりが広がったおかげで、地域の祭りの手伝いをしたり、四年前の東日本台風の際は、大雨浸水情報や避難情報などを共有して助け合い、災害を乗り越えたりしました。『伊達市の人は、世話好きで気さくで温かい』と地域の方が言っていました。『その通りだと思いました。令和になり、お祭りのやり方も伝統を守りつつもどんどん新しさを取り入れ、とても魅力的に発信されていると感じます。伊達市は、伝統を守りながらも、新しい考え、新しいやり方、新しい人を受け入れられる柔軟な地域だということを誇りに思います。新しいことは、違和感ではなく、伝統の始まりだと思えます。私はこれからも、新しく出たモモタルトや、あんぱがきのヨーグルトなど、ちよつとドキドキ、ワクワクするような新しい発想、新しい味の「新しさ」に挑戦し続けようと思います。

佳作

これからの伊達市について思うこと

霊山中学校 二年 菅野 愛

私が住む伊達市にはいろいろなお祭りや伝統芸能があります。それは年配の人が代々受け継いでくれたからです。そして私たち若者が今その伝統を引き継ぎ受け継いでいるからです。しかし、若者が減り、少しずつ受け継ぐことが難しくなってきたように感じます。

皆さんは伊達市についてどれくらい知っていますか。この作文をきっかけに伊達市のホームページを広き、調べてみました。令和六年六月の時点で人口約五万六千人、世帯数約二万三千世帯です。年齢の割合は、子供十三パーセント、十八歳から六十四歳が五十一パーセント、六十五歳以上が三十六パーセントです。この割合から伊達市では少子化が進んでいることがわかります。

私は一学期に職場体験で三日間、特別養護老人ホームに行きました。私が今回老人ホームを希望した理由は、将来看護師になり老人ホームで働きたいという夢があるからです。私が行った老人ホームでは、長年にわたる社会に貢献し、家族を支えてきた方への感謝の気持ちを込め利用者さん一人ひとりの思いを尊重することを大切にしているそうです。そして、入居する方に対して尊敬と感謝の心を持って接し、地域に貢献した施設づくりを目指しています。それを聞いて、私は、心を揺さぶられました。

地域全体で支え合い、自分らしく生きることが出来る伊達市になるよう、私も医療を通して支援できるように夢に向かって前に進みたいと、職場体験を通して決意しました。三日間という短い時間でしたが、お年寄りの方を労る気持ちや思いやりの気持ちが大切だと改めて感じました。

次は私たちが社会の役に立たないといけません。しかし、中学生である私にできることは限られています。そのため、今、私ができることを三つ考えました。一つ目は災害が起きたときに共助することです。自分や家族だけでなく近所の人と一緒に避難をすれば逃げ遅れてしまったり、被害に遭ったりする人が少なくなると思います。二つ目は、地域の清掃活動やイベントなどに積極的に参加することです。家族や友達を誘って地域に貢献していきたいです。三つ目は、挨拶をすることです。挨拶をすれば自然とコミュニケーションをとることができ、気持ちが明るくなります。

伊達市で暮らす私たちが笑顔で明るく元気に過ごせるために出来ることを少しずつやっていきたいと思います。すべての人が、住み慣れた地域で安心して暮らすことができるように、子供からお年寄りまでの市民一人ひとりが主役となるように、地域で支えていく体制を整えていかなければと思います。

そして、いままで伝統を守り、受け継いでくれた方への感謝の気持ちを忘れず、これからも私たちが若者が伊達市を全力で盛り上げていきます。

佳作

支え合いと思いやりは返ってくる

月舘学園中学校 一年 大河内 瑞希

私の住む下手渡地区では、ふれあい教室というものを開いています。ふれあい教室では、うどん打ち体験やグランドゴルフ、どんと祭や餅つき体験をしています。その中でも私が地域の人たちの交流を感じる行事が三つあります。

一つ目は、うどん打ち体験です。うどん打ち体験では、粉に水を入れてこねてのばして切るところまで行います。みんなで打ったうどんを、地域のおばさんやおじさんたちと机を囲んで食べます。仕事で疲れたおじさんたちや一緒に作ったおばさんたちと食べると、このような行事があり、みんなで参加することが人と地域をつなぎ、地域の未来を支えているのではないかと思います。

二つ目は、グランドゴルフです。グランドゴルフも、毎年行っている行事です。グランドゴルフは子供と大人を混ぜてチーム分けをし、スタンプラリーのように行います。子供と大人を混ぜてチームを作ること、あまり地域の人と関わったことのない子供たちが地域の人たちとふれあうことができます。私も初めて参加した時は、一緒に参加した父と違うチームで、緊張していました。しかし、地域のおじさんたちが

「いいぞ！上手だ！」

などと気さくに声をかけてくれました。そのおかげでその後はリラックスしてできました。この出来事から、地域の人たちは私が楽しくゴルフができるように声をかけてくれたのだということがわかりました。今考えると、ここにも思いやりの気持ちが隠れていたんだなと思いました。

三つ目は、餅つきです。餅つきは杵と臼を使って、月舘中央交流館で行います。交流館の近くにある家で、おばさんたちがもち米を炊いています。この間までそのおばさん達とは何も話したことがなかったのですが、もち米をとりに行くうちに、少し話すようになりました。ここでも地域の人たちとの関わりが一つ増えました。また餅つきをしている時は、おじさんたちが餅のつき方を教えてくれます。餅つきという行事を、おじいちゃん世代からおじさんたちが受け継いでくれたから、この餅つきがあるのだと思います。地域の行事が、人から人へ伝わることは、当たり前なのですが、大変なことだと思います。

私は、ふれあい教室を通して支え合いと思いやりは身近にあるということ、相手を支え合ったり思いやりすること、相手からも支え合いと思いやりは返ってくるということがわかりました。そして、この支え合いと思いやりの気持ちを私たちの世代でも続けていくために、いつでも支え合いの気持ちや思いやりの気持ちをもっていたいと思います。

佳作

暮らしやすい町とは

月舘学園中学校 三年 齋藤 大智

私達が住む伊達市は、子育て支援や学校教育にとっても力を入れていると思います。また、今年のテーマである「そだてましよう 支えあい」と思いうやりの気持ちを「の「支えあい」の面でも伊達市は充実していると思います。そこで、支え合いの気持ちがどこにあつて、暮らしやすい町がどのようなにして実現するのかを考えてみました。

伊達市は夏になると気温が三十度を越える日が多いです。その対策として今行われていて有名なのは、クーリングシェルターです。クーリングシェルターとは、適当な冷房設備が備わっていること、熱中症特別警戒情報が発表されたときは、クーリングシェルターを住民等に開放できるところ等の要件を満たす施設だそうです。この施設があるということは、その施設の人の善意があるからこそ成り立つ施設だと思います。「暑くても過ごしやすいように」という願いから、支え合いの心が生まれ、実現されたからこそ、暮らしやすい町ができていくのではないかと思います。

もう一つは、お祭りです。私が住む月舘町は毎年「小手姫の里夏祭り流灯花火大会」が行われます。このお祭りでは地域の会社や、地元の住民が協賛して花火を打ち上げています。そのおかげで毎年きれいな花火を見ることが出来ます。また、近くの交通整理や誘導も地域の方々が協力して

行っています。私は小さい頃からこのお祭りに来ていました。毎年毎年、多くの方々がこのお祭りに携わっていて、それに協力し支え合っているからこそこのお祭りが成り立っていて、私も毎年の楽しみにすることができています。さまざまな祭りでも地域の方々同士で協力し支え合つて、最高の祭りを行うことができます。そしてそれがその地域の風物詩や楽しい行事として広がり、地域の活性化に繋がると思います。また、それが暮らしやすさにも繋がってくるのではないのでしょうか。

私は、これらのことから、暮らしやすい町にするためには、地域に住む一人一人が「よりよい町にするにはどうすればよいか」を考え、どれだけ強い思いをもって行動していくかが大切だと考えます。そのためには、まずは私たちの世代が「暮らしやすい町にするぞ」という意識をもつことが必要だと思いました。私もそのためには何ができるのかを考えながら、いろいろな人と関わり、学んでいきたいです。

講 評

審査委員長 木村 圭吾（元栗野小学校長）

伊達市の市民憲章作文コンクールの八年目は、「そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ち」という課題でした。それには補足として「自らを高め、地域ぐるみでお互いを支え合い、安心な子育てを実現し、住み慣れたふるさとで自分らしく暮らせる社会づくりをめざします。」という説明が添えられています。それらを小・中学生がどのように受け止め、どのように内容を具体化し、文章にまとめているかが審査のポイントでした。

今年度は、市内の小・中学校の協力のもと、四百三十二点の作文が寄せられました。その中から学校推薦のあった三十四点の作品が最終審査に残りました。三人の審査委員により選考が行われ、最優秀賞、優秀賞、優良賞、佳作の各賞が、次のように決まりました。

*

最優秀賞に輝いたのは、月舘学園小学校六年の関根湊笑さんの「響け太鼓のリズム」と松陽中学校一年の橋本理央さんの「思いやりの種を私から」の二つの作品でした。関根さんは、霊山太鼓の練習を通して家族や地域の方とのふれあいが書かれています。霊山太鼓の響きがみんなの心の一つにしていく文章表現は伏線も取り入れられてとても巧みです。中学生の

橋本さんは、ひいおばあちゃんの暮らしりと自身の高齢者疑似体験という二つの事柄を取り上げました。中学生らしい広い視野で実体験から感じたことや考えたことが書かれています。社会と関連付けながら「思いやりの種をまきたい。」と書いたまとめは、納得して読むことができました。二つの作品とも、事例が具体的に適切で、テーマに対する考えや思いが深められていて説得力がありました。

優秀賞に選ばれたのは四人の作品です。小学生部門は、堰本小学校六年の佐藤大惺さんの「地域のつながりを大切に」と小国小学校六年の高野一晴さんの「安心して暮らせる街、伊達市」の二作品です。中学生部門は、伊達中学校二年の芳賀彩風さんの「音楽の力」と霊山中学校三年の永井美緒さんの「支え合いと思いやりについて考える」の二作品です。佐藤さんは、おじいちゃんやんの米作りに地域の人々が協力していることに感心して、地域のために支え合っている生活を知り、「お互いになくはならない関係」があるとまとめました。高野さんは、自身が引越してきた体験をもとに、親の故郷に住む心地よさや人のつながりのおもしろさを書いていきます。そして、団結の力で地域を盛り上げたいと述べています。芳賀さんは、吹奏楽きらめき事業での演奏会の経験を書いています。演奏を上手になりたいと思う気持ちが集まって素晴らしい演奏になりました。「音楽の力は魔法」と音楽を通した人とのつながりを述べています。永井さんは、病院での老夫婦を助ける地域の人のやさしい対応から「相手のことを自分のことととらえる」大切さを述べています。

優良賞に選ばれたのは八人の作品です。小学生部門は、伊達東小学校五年の佐藤葵さんの「近所の人達とのつながり」、大田小学校六年の津田倫希さんの「地域の温かさ」、保原小学校五年の清野希空さんの「支え合いの気持ち」、掛田小学校六年の遠藤花奈さんの「あいさつと思いやりを広げたい」の四作品です。佐藤さんは、二人のおばあちゃんの暮らしが、地域の人に支えられていることに気づき、学校でも支えあって生活したいと述べています。津田さんは、おじいちゃんとおばあちゃんがいる伊達市に引っ越してきたことで地域のつながりを経験し、地域の行事に積極的に参加したいとまとめました。清野さんは、地域の人をはじめ多くの人の支え合いの中で生活していることから、自分も「大丈夫ですか。」と声をかけられる人になりたいと抱負を述べました。遠藤さんは、霊山地区に引っ越してきて、あいさつによって、地域の人とつながることができた経験を書いていきます。「あいさつは勇気がいるけれど」、それでみんなとつながることができることを訴えています。

中学生部門は、伊達中学校一年の富樫優成さんの「家族が増えて」、同じく三年の小野将さんの「人々の取組の魅力」、梁川中学校二年の大河原千暖さんの「支え合いと思いやり」、桃陵中学校二年の細田果音さんの「支え合いの町」の四つの作品です。富樫さんは、自分が双子の兄になったことをきっかけに、家族内の助け合いに感謝し、そこから「こども食堂」が地域の助け合いになっていることに気づき、感謝することの大事さを述べています。小野さんは研修会の参加から、伊達市の魅力を調べるように

なり、様々な施設が地域の人々を支えるためにあることに気づき、積極的にイベントに参加したいと述べています。大河原さんは、水害のために避難生活することになり、避難者同士が助け合っていることに感動し、思いやりは人を勇気づける力があるとまとめました。細田さんは、吹奏楽部「ありがとうコンサート」にかかわる地域の人々の思いを通して「音楽は人を笑顔にする」とまとめています。

佳作には八つの作品が選ばれました。小学生部門は、伊達小学校五年の小山真桜さんの「支え合いのマラソン大会」、伊達東小学校六年の斎藤悠生さんの「思いやりで繋がったお祭り」、上保原小学校五年の宮口隆成さんの「伊達なまちづくり」を指して、柱沢小学校六年の高野真奈さんの「私にできること」という四作品です。中学生部門は、梁川中学校一年の石川楓菜さんの「気がつけば梁川っ子」、霊山中学校二年の菅野愛さんの「これからの伊達市について思うこと」、月舘学園中学校一年の大河内瑞希さんの「支え合いと思いやりは返ってくる」、月舘学園中学校三年の齋藤大智さんの「暮らしやすい町とは」の四作品です。いずれも、地域の人々との支え合いや思いやりに着目し、自分たちも行動していこうという作品でした。

最終審査に残った作品は、支え合いや思いやりの心を経験や体験と関連付けながらまとめていました。そこから、よりよい地域づくりやよりよい自分になりたいという思いや願いが伝わってきました。審査したどの作品も心温まる内容でした。



伊達市民憲章

～心をひとつに～

わたしたちは、緑豊かなふるさとの歴史と伝統に誇りをもち、
協働の精神でさまざまな困難をのりこえ、
健康で安心して暮らせる活力ある「伊達なまちづくり」をめざし、
この憲章を定めます。

一 まもりましょう

ふるさとの自然と歴史を

一 つなぎましょう

世代の絆とたしかかな信頼を

一 そだてましょう

支えあいと思いやりの気持ちを

一 きずきましょう

学ぶ心とゆたかな文化を

一 めざしましょう

すこやかで活力のあるまちを

市民憲章の解説

【憲章名】 憲章名を「伊達市民憲章」とし、副題の「心をひとつに」という言葉は、伊達市が合併したときの「伊達織りなす未来ひとつの心」という表現に象徴されるように、旧町それぞれの個性を生かしつつ、「伊達市」として一体になろうという理念を継承したものです。

【前文】 本憲章は、私たちが誇りとする自然、歴史、文化、伝統を尊重・継承し、市民みんなの力で大震災、原発事故、人口減少に伴う社会問題などの困難を克服するとともに、地域も人も輝き、豊かで明るい未来をめざす伊達市の実現のために定めるものです。「伊達なまちづくり」には、誰もが健康で自分らしく生涯を過ごすことができるまちでありたい、という強い願いが込められています。

【本文】 子どもからお年寄りまで声に出して唱え、日々の暮らしの中で明確な目標を持ち、市民が協力、協調しながら実践しやすいよう、簡潔で親しみやすい表現にしています。「くましよう」という五つの呼びかけには、市民一人ひとりが主人公となり、希望あふれる伊達市の未来を積極的に創り上げようという思いが託されています。

一 まもりましょう ふるさとの自然と歴史を

豊かな自然環境と、先人が築いてきた歴史、文化、伝統を大切に守り、それらを生かしたまちづくりに努め、心豊かに生活できるふるさとの実現をめざします。

一 つなぎましょう 世代の絆とたしかな信頼を

世代の垣根を越えて人々が連携し、望ましい信頼関係を築き、創意ある取り組みで地域の活力を生み出し、規律を尊重した安全・安心な地域づくりをめざします。

一 そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ちを

自らを高め、地域ぐるみでお互いを支え合い、安心な子育てを実現し、住み慣れたふるさとで自分らしく明るく暮らせる社会づくりをめざします。

一 きずきましょう 学ぶ心とゆたかな文化を

教育や文化を尊重し、読書に親しみ、生涯を通して学べる教育環境を充実させ、広い視野に立って行動し、地域を活性化できる創造的な人材の育成をめざします。

一 めざしましょう すこやかで活力のあるまちを

健幸都市宣言をふまえ、子どもからお年寄りまで運動に親しみ、地域も人も輝く活気あるまちづくりを推進し、地域の特色を生かした産業の振興・発展をめざします。



編集発行：福島県伊達市総務部総務課
令和7年1月